

御所から来た障壁画 ～〈大広間〉・〈黒書院〉 帳台の間～

慶長8年(1603)、江戸幕府の初代将軍、徳川家康(1543-1616)が築城した二条城は、寛永3年(1626)の後水尾天皇(1596-1680)の行幸を控えて改修されました。本丸が新設され、二の丸御殿は改修、内部の障壁画も新たに描かれました。慶應3年(1867)に幕府が終焉を迎えた後、二条城は明治政府の所有となります。その後、明治17年(1884)から、京都市に下賜される昭和14年(1939)までの間、二条城は皇室の離宮「二条離宮」となります。この間、桂宮家の御殿が本丸に移築され、二の丸御殿等の飾金具が葵紋から菊紋に取り換えられるなど、皇室の離宮に相応しい体裁が整えられました。また、二の丸御殿の一部に、もともと別の場所のために描かれた障壁画が、嵌め込まれました。今回は、これらの障壁画のうち、〈大広間〉と〈黒書院〉、それぞれの帳台の間の障壁画を紹介します。

帳台の間の機能と寛永期の障壁画

二の丸御殿の〈大広間〉・〈黒書院〉の間には、書院造の要素の一つである帳台構が備わり、帳台襖を開くと、帳台の間と呼ばれる部屋が現れます。史料は見つかっていませんが、この部屋を通して、将軍が一間に入った、いわば前室のような機能を果たしたという説もあります。史料によれば、江戸時代には、〈大広間〉と〈黒書院〉の帳台の間には、花鳥画が描かれていました。しかし現在、この花鳥画は、帳台襖の裏側各4面(展示なし)と〈大広間〉の戸襖2面(展示室正面の長押下、東より2・3)にのみ残り、それ以外の建具や壁面には、以下に述べる、別の障壁画が貼られています。

名所風俗と花鳥

〈大広間〉帳台の間の障壁画のうち、長押下の《竜田風俗図》(展示室正面東より1、同東側5面)には、紅葉の名所、竜田川の流れと連なる山並み、その麓の茶店や民家と、そこを訪れ、あるいはそこで生活する人々が描かれます。竜田川には、烏帽子を被った貴人達が、川に流れる紅葉を眺める姿が見えます。長押上の《武蔵野図》(正面東より1・2、東側5面)は、秋草が生え、霞が棚引く野原に、満月が浮かぶ秋の武蔵野を描きます。

〈黒書院〉の帳台の間の障壁画は、《名所風俗図》、《松柳白鷺図》、《秋草図》の3つの画題に分かれています。そのうち《名所風俗図》は、富士山(展示室正面西より1・2の長押下)と三保松原(西側北より1から3の長押下)、和歌の神様を祀る玉津島神社のある和歌浦(西側南より1から4の長押下、西側北より1の長押上)と、同じく和歌の神様を祀る住吉大社(西側北より2・3の長押上)の景観を描きます。《名所風俗図》は、和歌にまつわる名所を俯瞰的に捉え、そこを訪れる人々の様子を、軽妙な筆致と柔らかな色彩で、生き生きと描き出す点に特徴があります。《松柳白鷺図》(正面西より1・2の長押上)は、雪の積もる松と雪、松にとまる白鷺を描き、《秋草図》(西側南より2・3の長押上)は、水仙や萩などの秋草を描きます。

これらの障壁画には、金具跡や切り貼りした痕跡があり、もとは別の場所のために描かれたものが、二の丸御殿の〈大広間〉と〈黒書院〉の帳台の間に転用されものだと分かります。

御所から来た障壁画

上記のうち、〈大広間〉の《竜田風俗図》と《武蔵野図》、〈黒書院〉の《名所風俗図》は、先行研究によって、御所の中にある、

天皇の正室、女御のための御殿(女御御殿)の一部で、女子が産まれた際に使う姫宮御殿に描かれたものであり、筆者は、《竜田風俗図》は狩野宮内(生没年不詳)、《武蔵野図》は狩野永伯(1687-1764)、《名所風俗図》は鶴沢探山(1658-1729)であることが分かっています。

この姫宮御殿を含む女御御殿は、享保元年(1716)に中御門天皇(1702-37)の女御となった近衛尚子(1702-20)のために、正徳5年(1715)から享保元年(1716)の間に建造されたものでした。しかし、享保5年(1720)、尚子は、男子(後の桜町天皇、1720-50)を産んだ後、一月も経たずに亡くなってしまいます。この男子が皇太子となることが決まった享保12年(1727)から翌年にかけて、女御御殿の大半を転用する形で、皇太子が使う東宮御所が建てられました。この時、姫宮御殿は転用された記録がないことから、その建物は撤去され、障壁画のみが保管されたと考えられています。

明治18年(1885)の史料に、当時、二条城内に保管されていた障壁画の一覧があり、〈大広間〉の《竜田風俗図》と《武蔵野図》、〈黒書院〉の《名所風俗図》に該当すると思われる絵がここに含まれることから、これらは、享保12年から明治18年の間のどこかの時点で、二条城に移されたと考えられます。ちなみに、この女御御殿の主、近衛尚子は、五摂家の一つ、近衛家の出身です。尚子の父、近衛家熙(1667-1736)と祖父、近衛基熙(1648-1722)は、共に朝廷の要職を勤め、とりわけ幕府との繋がりを重んじた人物です。基熙の娘で尚子の叔母、近衛熙子(1666-1741)は、6代将軍徳川家宣(1662-1712)の正室となり、家宣が亡くなると、幼い7代将軍家継(1709-16)を支え、8代将軍吉宗(1684-1758)の就任にも強い影響力を持ったとされます。尚子は、将軍の養女として関東に下向する話もありましたが実現はせず、熙子の働きかけと霊元法皇(1654-1732)の裁可によって、中御門天皇に入内することとなったのです。

奇しくも、尚子に女子が産まれた際に使われるはずだった姫宮御殿の障壁画は、時を経て、徳川将軍家から皇室へと主が変わった二条城二の丸御殿に貼り込まれ、今に伝わることとなりました。これら御所から来た障壁画は、18世紀初頭の御所文化を伝えるとともに、皇室の離宮となった二条城の歴史を伝える、重要な作品群でもあるのです。

中野 志保(元離宮二条城事務所 学芸員)